



Title	往還しなかった人
Author(s)	大川, ヘナン
Citation	未来共創. 2020, 7, p. 336-338
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76168
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

往還しなかった人

大川 ヘナン

そこはロンドリーナという町の日伯文化協会の一室であった。図書室と呼ばれていたその部屋は四方に本棚のある10畳あまりの部屋であり、私と先生が座っていた。その日初めて会った私たちは2時間あまり話をした。私にとって特に重要な話ではなかった。それは今についての話、好きなことについて、人生についての話だった。その出会いが私の人生を変えた。今から12年前の話である。

私は「外国人」である。きっと私自身を表すのに一番適した言葉である。私はブラジルで生まれた。8歳までブラジルの小さな町で暮らした。裕福ではなかったが、食べることには困ることは一度もなかった。親はいなかったが、寂しい思いをすることはなかった。小さい頃から「日本人」と呼ばれていたが、日本には行ったことがなかった。それでも私は日本人であった。8歳の時に初めて祖母に連れられて日本を訪問した。私はずっと旅行だと思っていたが、気づいたら日本にすでに10年も暮らしていた。日本では多くの友達を作ったが、同時に多くの辛い思い出も築いてきた。私は常に「外国人」だった。高校卒業後、私は大学に進学できなかった。それは私の中で大きな挫折だった。挫折を抱えて母国へ帰ることになった。母国で気持ちを一新して一から頑張ろうとしたが、私は再び挫折した。そして、母国でも私は「外国人」だった。行き場のない私がたどり着いたのがあの小さな図書室であった。私が18歳の時の話である。

今の自分をあの時の自分は到底想像することはできなかったのだろう。まさか自分があの小さな部屋で話をした先生と同じ大学で勉強をし、同じ研究分野で研究することになるとは、到底想像することができなかったのだろう。振り返ると人生には様々なターニングポイントがあり、その当時の自分には些細な日常のイレギュラーがその後の人生の大きな分岐点であると知る。私にとっては12年前の18歳の時のあの小さな部屋である。重要でない話が、重要になり、なんでもなかった2時間が全てを変えた。

なんでもなかったことが文字になり、紙に記された。それは不思議な感覚であった。自分ではないように感じた。私ではなかった。でもそれは確実に私であった。私の知らない悲惨な私であった。不思議な感覚であった。何故なら自分を悲惨と思ったことは一度もなかったからである。しかし、そこには周りの者から見られる私の姿が描かれていた。そして、不思議なタイトルが付けられていた。「往還する人々」と。私は「往還」したことがなかった。私の思う「往還」はA地点があり、B地点があり、その間を行ったり来たりすることである。しかし、私が旅立ったブラジルも、来日した日本も、帰国したブラジルも、再来日した日本も、私にとって全て違う場所であった。物理的に同じ場所であっても、私にとっては全く別の場所であった。旅立った母国は、帰国した時には母国で無くなっていた。来日した日本は、再来日には希望に満ちていなかった。私は「往還」していない。私は常に流れに「流されていた」。私は溺れるかどうかの瀬戸際を常にもがきながら、常に岸を求めて、必死にもがいていた。今私がその岸についたのかどうかははっきりするのは、もしかしたら12年先かも知れない。

あの小さな図書室にいた少年は今もここにいる。しかし、あの時のような不安や諦めや失望はない。何故ならそれはすでにずっと昔に流れて無くしたのである。今までの私のように。私は「往還」しない。何故なら戻る地点がないからである。戻る必要もないからである。「外国人」の私にとって母国もないからである。しかし、それは悲しいこ

とではない。悲観することではない。悲しむことではない。何故なら私は常に新しい地点へ泳いでいるからである。流れがわかればもがく必要もなくなる。不安も恐怖もなくなる。溺れないことを覚えたから。

12年過ぎて、私はここにいる。誰も想像できなかった場所で、12年前のことを思い出しながら書いている。あの小さな部屋にいた時の自分を思い出しながらここにある。これから12年後、私が誰かの人生に影響を与えられるように私はここにいる。